

「故郷では敬われない」

2014年08月22日

マルコによる福音書6章1節～6a節。「イエスはそこを去って故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。『この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。』このように、人々はイエスにつまみづいた。イエスは、『預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである』と言われた。そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた。」

主イエスはガリラヤ湖周辺で「神の国」の宣教を始められた。飢え渴く民衆は、慰めと励ましに満ちた言葉を聞き、病気をいやされ、悪霊から解放され、歓喜して群がった。ガリラヤはもとよりユダヤ全土に、主イエスの名声は伝わった。そのような時、弟子たちと共に故郷ナザレに帰られた。礼拝が守られる安息日に、村人が集まった会堂で主イエスは教えられた。会衆の中から誰でも立ち上がって、自由に語る事ができる礼拝であった。会堂では主に、民衆の宗教教育に携わっていたファリサイ派の人々が教えていた。彼らの教えは律法を細かく解釈し、守れと強要する、平板で味気ないものであった。主イエスは、ご自分の実存をかけ、ご自分の言葉で話された。村人たちは、主イエスの知恵に感嘆し、手で行われる奇跡に感嘆した。しかし反面、この人は、大工で、マリアの息子で、兄弟姉妹もナザレで暮らしているのではないかと言った。貧しい大工の家庭で育ち、肉親もここに住んでいる、子どもの頃のイエスを知っている人は、喧嘩もした、恋もしたと思い出したであろう。そのイエスに何ができるかと軽蔑の言葉を投げかけた。肉の目で見て、主イエスの言葉と業を受け入れなかった。主イエスは、預言者は自分の故郷、親戚、家族からは敬われないと応じられた。ナザレでは不信の壁に阻まれ、神の国の宣教は進展しなかった。

パウロは、コリント二5章16節で「それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません」と書いている。パウロは肉の主イエスに出会っていない。この言葉は、ペトロやヤコブのように肉の主イエスを知らないパウロが二流、三流の伝道者であると蔑まれたことに対する反論であろう。パウロは、肉の主イエスを知るのではなく、信仰において、キリストと結ばれた人が「新しく創造された者」であると力説している。

私は聖書を読んで、主イエスを初めて知った時、愛の凄まじさに感動し、牧師に「イエスと同時代に生きて、会ってみたかった」と言った。牧師は「肉で見ても見なくても同じです。信じる人は信じ、信じない人は反発するのです」と言われた。霊において、主イエスを知るところで「新しい存在」とされることは真実であり、信仰の喜びである。

私たちが人と出会った時、その人の肉の過去、出自や学歴や地位を問うのではなく、あるがままの隣人として関わる。今、ここにいる人と交わるところで、互いを高め、深め合う関係を結ぶことができる。主イエスを知ること、また隣人との交わりも、肉で見る冷やかな不信でなく、開かれた信頼において関わるべきである。